



日本の良さを大切に

駐日パラグアイ共和国特命全権大使
Ambassador of the Republic of Paraguay to Japan

イサオ・タオカ 氏

H. E. Mr. Isao Taoka

Profile

徳島県生まれ。14歳でパラグアイに移住し、2004年まで日系人としてパラグアイに住んでいたが、「パラグアイのことをもっと日本人に知ってほしい」という思いから、日本国籍を放棄し、パラグアイ大使として来日した。

パラグアイには 昔の日本がそのまま残っています

池崎 パラグアイでは、日系人や日本語、日本文化について、今どのような様子でいらっしゃいますか。

タオカ 最近は2世の男性が現地の女性と、または、日系人の女性が現地の男性と結婚する例が多くなっていますね。昔はそういうことを嫌って、息子が現地の人と結婚するというと絶対許さないとかということが多かったんですね。最近は徐々に薄らいできて、現地のお嫁さんが日本人の家庭に入れば、一番に日本語を覚えようとし、次に日本料理だとかお味噌汁だとかご飯だとか日本的な料理を勉強します。日本的な習慣を持つ部落では、昔の日本がそのまま残っています。

池崎 50年前、60年前のものがまだ残っていらっしゃる…。

タオカ そうなんです。隣でおめでたいことや不幸があると、周りの人が手伝って助け合いをするんですね。昔ほどじゃないんですが、まだそういった日本的な習慣が続いています。

池崎 そうしますと今の東京よりずっと日本的なものがあるんですね。

タオカ ええ、日本の新聞社の方などが私たちのところに来ると、「いやこれは昔の日本そのままだ。」と言うぐらいです。日本は文明化され、経済力がつきましたから、そういう流れに自然となったんだろうと思うんですね。

小学六年生の過半数は日本語能力 試験一級合格

タオカ パラグアイでは、日本語を大事にしようということで、外国で日本語能力試験が受けられるようになりました。パラグ

アイでは、小学校の六年生で一級の日本語の能力試験をだいたい通るのが過半数です。

池崎 小学校ですか。

タオカ 小学校の六年生です。

池崎 一級ですか。

タオカ ええ。

池崎 それは本当…ですか。

タオカ そうです。小学校の一年生から日本語を勉強していますから。南米では学校が半日制なので、午前中は学校で午後は日本語を勉強するだとか、反対に午後は学校で午前中日本語だとか、場所によって異なりますが…。

池崎 午前、午後のどちらかに学校に行けばいいということですね。

タオカ 学校の校舎が十分でないために、午前中に40人、午後に40人だとか分けるわけですね。だいたい20人から40人の間が1クラスです。

池崎 学校の設備の関係で半分ずつに。

タオカ そういう理由が多いです。午前中組の子供は午後もう帰ってしまっていることがないわけですね。それでその分を日本語にということで、毎日そういう方法でやる日本語学校と、週末もぎっちり8時間弁当を持ってこさせてやる日本語学校とがあります。中には、日本語だとかお花だとか生け花とかいろいろ教えているところもあります。JICAから送られた専門家が現地の方に日本語教育をする学校、それから日本人会が持っている学校、日本から来られている外交官だとかJICAとか専門家だとかで行っている学校などがあります。日本人学校というのがありますが、その学校には現地の子供や日系人の子供は入れません。日本から出張して再び日本に戻る家族のためにあるんです。日本の文部省から日本の先生が送られているわけですね。そういった学校では、

日本の道徳的な教育を日本語の中に織り込んで教育しています。

池崎 日本にいる子どもからしますと、いつも「改革の必要性」だとか「日本の経済はこの点がいけない」とか日本人自身自国の文化や経済の状況を非常にネガティブにとらえていますけれど、パラグアイのお国の中では逆に日本の道徳的なものを非常に肯定的にとらえ、大事にしようと思っただけです。

日本の若い人は、日本を外から眺めてみる機会をもとう

池崎 大使のお立場から、日本人は日本語や日本文化についてこう考えるべきじゃないか、こういうふうにするべきじゃないか、という何かアドバイスをいただけますか。

タオカ 今一番自分が日本に来てみて感じることは、パラグアイでもいろいろありますけど、特に若者たちの間で日本の文化が失われていることだと思います。田舎に行けばまだ別ですが、たくさん問題がありますね。両親が働いていて親子の繋がりが薄らいで来ているとか。そういうものを取り戻すのに一番いいと思うのは、東京暮らしや学校に行くのを嫌がる子をパラグアイに送ることで。つい最近聞いた話ですが、ある日本の社長の息子さんが家庭で親としゃべらなくなり、学校にも行きたくないと抵抗したそうです。ところが、3カ月ぐらいパラグアイに預けてみますと、日本の良さ、親の良さ、日本の文化というものを改めて身に感じたということです。日本にいと比較ができないために、日本の家庭的な良さを感じられないままです。そういうのを見ていると、日本側にはパラグアイのたくさんの若者を受け入れていただいていますけど、やっぱり日本の若者もパラグアイに行っていたきたいと思います。そういう経験をすることによって、日本に戻ったときに親を思う気持ちも変わってきたりして、そういう方々から非常に嬉しい感謝の言葉をいただきました。そういうものも含めて、日本の若者も外国で日本の良いところを改めて感じる機会を持つべきだと思いますね。

池崎 日本は満たされているといいますか…平和もそうですし、親も、経済的なレベルも、何にも欠かしていることがない。欠けることがない。本当に一見満たされていて、当たり前ということで感謝がないということですね。

タオカ そういことですね。ですから平和が来ると次に何が訪れるかという、今の日本の現状だろうと思うんですね。

日本で一番感心することは…

池崎 日本の若い人には外国に出て日本を外から眺める経験をした方がいいというアドバイスとともに、大使がご覧になって、今の日本が大事にするべき日本のいいところ、というのがあれば教えていただけますか。

タオカ そうですね。田舎に行くときに家庭の温かみだとか環境だとか残っていると感じますが、日本の文化の伝統的な良さはまだまだあると思うんですね。でも、日本で一番感心するのは人をごまかすようなことが少ないことです。例えて言えば、店にあれだけのものが並んでいるけど誰一人としてお金を払わずに持っていく人などいません。そういうことは誰も見ていなくてもしなないということですね。南米でも同じような売り方をしたらいつの間にか全部なくなってしまいます。

池崎 自動販売機のことはよく言われますね。多くの国では一週間もそこに自動販売機があるということはない。まず機械が壊されて商品は取られお金はなくなっているというふうな話は時々聞きます。

タオカ パラグアイでは「日本時間」と「パラグアイ時間」という二つの言葉があるんですけど、例えば会議があるとか何か始まるといった時に時間どおりに始まると「今日は日本時間」、遅れたとしたら、「今日はパラグアイ時間」というようなことを言います。かっこ悪いことなんですけど、それだけ日本というのは時間に正確なんですね。

池崎 生真面目というんでしょうか。真面目なところは良いところとしてあると。やはり、きっちり時間を守るというのは良いということでしょうか。

タオカ 潔癖すぎるところもありますけどね。人にもよりますけど。冷たい感じを受けるときがあるんですね。何か分からないことを聞いたときや、道を聞いたときなど。一方、外国人には案外優しいという人もいますけど。

うちの家内が電車に乗ったとき、3メートルか2メートル離れたところで中学生ぐらいの子が倒れたことがあるそうです。たぶん眠かったのか何か原因は分からないですけど、周りにいる人が誰一人として手を差し伸べて「大丈夫？」という声をかけないということですね。

池崎 誰も声をかけなかったんですね。

タオカ 声をかけなかったそうですね。どうしてだろう。見ている人は冷たい目で見ているんですね。そして斜め前にいた一人の中年の女性が「かっこ悪い」と口に出したそうですね。

池崎 そうですか。倒れている人を目の前にして「かっこ悪い」と言ったんですか。それは東京のことですか。

タオカ 東京の電車の中です。そういうのを見ると何となく冷たいと感じます。最近は何も気にはならなくなったんですけど、歩いているとき「こんにちは」と声掛けても何も言ってもらえないというのは家内にとって一番ショックだったようですね。

池崎 挨拶をしても挨拶を返してくれないというのはちょっと考えられないですね。

タオカ 田舎ではそうじゃない。挨拶をして子供が通るのをよく見たりしますから、日本も全体的にと言うんじゃないですけど、都会ではそういうのがない方が良くっていう環境になっているのか、と受け止めますけどね。

池崎 それは悲しい現実のご指摘ですが、それも一つの現実だと思います。

今日はいろいろなお話を本当にありがとうございました。

